
白黒逃避行

空波四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒逃避行

【Nコード】

N1649Z

【作者名】

空波四季

【あらすじ】

村を追われた主人公が森で妖精と出会う、ボーイミーツガールな話。作者が不真面目なので更新は不定期です。

君と出逢った日(前書き)

初投稿です。更新は不定期になると思いますがよろしく願います。

君と出逢った日

俺は今森の中を走っている。樹は空を覆わんが如く茂り、もはや晴れているのか曇っているのか定かではない。森の中は薄暗くジメジメしていて、体からキノコが生えそうだ。そんな森の中を俺は枝が皮膚をかなぐるのも厭わずがむしやらに走り続けている。

「ハア、ここまでくれば、ハア、大丈夫、だろ…。」
そういつて踏み出した先で唐突に地面が消えた。正確にはそこは崖になっていた。

「ああああああああ！！」
俺は落下した……………。

…体の節々が悲鳴をあげている。さっきの落下のせいで体のあちこちをぶつけたからだ。幸い大きな怪我をしておらず、気も失っていないかった。

「…あー、いてえ。それにだせえ。…しかし此処はどこだ？」

俺は軋む体を煩わしく思いながらも立ち上がった。周りには草はぼうぼうと生えており、更に茶色で視界が埋まるほど樹木が群生している。

俺が落ちてきた崖は遙か上にあり、上に登るのは難しそうだ。構造としては、巨木の上を崖が覆っているという感じだろうか。きっと の逆向きみたいな形をしているんだろう。

とりあえずこのまま呆けていても埒が明かないのでとにかく歩いていく。幸い此処なら追っ手の心配はいらなさそうなので焦る必要もない。

「しかし、ホントに此処は何処なんだ？」

俺は思考を巡らす。

だが全くわからず、諦める。それに今は此処から出る方が先だ。こんなところにいたら食べるもの飲むものもなく餓死してしまっただ。

そう思い、俺は黙々と歩を進める。

10分程歩いただろうか、何やら前方で音がする。…獣だろうか。だとしたら………ついている。

音は次第と大きくなり、一際大きな音がしたと思ったら、ニメートル弱の熊が襲い掛かってきた。

「ヴオオオオオオオオオオ!!!」

猛々しい唸り声をあげ、俺をその大きく鋭い爪で切り裂こうとする。しかしその爪は俺を切り裂くことはなく、熊は驚きの表情を見せる。なぜなら俺が熊の爪を指から伸びた黒く長い爪で受け止めたからだ。長さは恐らく九十センチメートル程度。

その薄さとは裏腹に強靱な硬さと耐久力を兼ね備え、更に鋭くなっている。

「相手が悪かったな。悪いが死んで俺の夕飯になってくれ。」

俺はその爪で切り裂き、最後に心臓を一突きにして熊を殺した。おれが生きていくために。

殺した熊を引きずりながら更に奥へと進む。割と重いが、まあたいしたことはない。しかし…

「食糧は確保したけど水がないな。どっかに川とかねえかな。」
動物がいたんだから水もあるだろうが、だからといって簡単に見つかるかといったら話は別だ。

「ハア、自力で見つけ出すしかないよな。」

溜息が一つこぼれる。ああ、憂鬱だ。

それにさっき熊を殺した時に浴びた返り血で服が血生臭いことも俺をさらに憂鬱にさせる。泣きっ面に蜂とはこのことか。

そんな思考を巡らせていると、どこかで水滴が跳ねる音が聞こえた……気がする。予感かもしれない。

何かに引き寄せられるように俺はその方へ足を向けふらふらと歩を進めていく。

歩くごとに周りの木々が減ってきて徐々に視界が晴れてきた。草も背丈が低くなり、歩きやすくなってきた。

その先に見えたのは……………

「……………綺麗だ。」

そこで俺が見たものは、大きく澄んだ泉とその泉の真ん中で跪く天使のような少女の姿だった。

弁明（前書き）

調子乗って書いたらなんか書けた。でも内容はあんまない。

弁明

そこにいた少女は本当に美しい少女だった。透き通るような白い肌をしており、まるで水晶のようだ。さらに体の線は細いが女性的な質感のある四肢。実に均整が取れている。顔は小さく少し大人びた顔付きで、可愛いというよりは美人といった感じだ。目はキツすぎず、しかしおっとりとした感じでもなく、このあたりが大人っぽさを醸し出しているのだろう。さらにこれと長い睫毛が相俟ってどことない儂さを漂わせている。

しかし最も特徴的なのは、腰まで届いている透明感のあるライトグリーン^①の髪だ。艶があり、どこからか洩れ出している光りを反射して輝いている。

よく見れば目も同じ色をしている。彼女の姿は神秘的で神々しささえ感じる。そう、まるで人間ではないような……………。

彼女のあまりの美しさに俺が見惚れていると、彼女はこちらに気付いたようだ。最初は驚いたような顔をしていたが、直ぐに眉根を寄せてこちらを睨んできた。

「…あなた誰？一体どこから入ってきたの？それに、…………その熊はなに？あなた、人間じゃないの？」

嫌悪感が多分に含まれていたこの言葉が胸に刺さり、俺は正気に戻った。

「あー、えっと、怪しいものじゃない。たまたま落ちて歩いて来たら此処にいたんだ。それとこの熊は襲い掛かってきたから殺したんだ。食べ物もなかったし。…あと俺はとりあえず、人間、…だと思っ。」

「嘘っ！だってここには結界が張ってあるもの。人間が入って来られるわけない！あとどうやったら人間が熊を素手で殺せるっていうの！」

「…よく素手だってわかったな。」

「わかるわよそれぐらい。見たところ武器だって持ってなさそうだし。」

「銃で撃ち殺したかもしれないだろ？」

「……“じゅう”ってなに？」

「……………。いや、知らないならいいんだ。」

ちなみにこの世界で銃は一般的なものである。城の衛兵なんかは必ず所持している。

「なにはどうあれ、結局素手で殺したんでしょ？」

「まあ、な。」

「じゃあ例えあなたが人間だったとして、熊を素手で殺して結界を通り抜けてくるような輩を警戒するなってほうが無理だと思わない？」

「……………御尤もです。」

正しいのは彼女だった。そりゃそうだ。俺だって今の俺みたいな奴が突然現れたら警戒するどころか縄で縛り上げて取調べを行うだろう。それを思えば彼女の態度は慈悲深いものだろう。しかしこのままではまずいのでなんとか警戒を解いてもらわないといけない。

……………どうしたらいいだろう。何か名案はないだろうか。

そうだ、一か八か……………

「俺は君に危害を加えるつもりはない。」

「だから……」

「その証拠に！……俺の秘密を、姿を見せる。」

「……………え？」

弁明（後書き）

果してその正体とは！？

… きっと次回はそれだけです。

俺の正体（前書き）

前の予告通りです。

俺の正体

「あなたの正体って……、それは気になるけど。でもっ！別にそれを明かされたからって信用すると思うの？」

こう返して来ることはだいたい予測はついている。しかし、俺にはこうすることしか出来ない。他にも手段があるのかもしれないが、生憎と俺には大した教養もないので思いつかない。だから、俺は話しつづける。

「いいから聞いてくれ。俺はこの秘密のせいで何時も酷い目にあってきた。この秘密をあんたがばらしたら俺は直ぐに此処から逃げないといけなくなる。捕まったらたぶん極刑だろう。」

「…いいわ、話してみて。」

どっちら少しは信用されたようだ。

「ありがとう。まず俺の名前はヴオイド・クルータス。俺は小さな村で生まれた。生まれは普通なんだ。でも俺は、生まれた頃から他の人間とは違った。決定的にな。まず見ての通り髪も目も真っ黒だ。」

そういつて俺は自分の髪と目を指差した。

「しかしまあ、なかにはこんな奴もいるらしい。俺のいた村の村長が見たことがあるっていつてたらしい。俺は見たことないけどな。でもそんなことは些細なことだ。これから見せるものに比べればな。」

俺はそういつて着ている服を脱ぎだして上裸になる。別に露出したかったからとかじゃない。

しかし彼女は予想外だったらしい。慌てて目を覆う。

「ちょっと！？ななななんで服脱ぎ出してるの！？な、ナニを見せる気！？」

とか言いつつ顔を隠している両の手指の隙間から真っ赤な顔が覗いているのは気のせいだろうか。

「落ち着いてくれ、これ以上は脱がない。…いいか？俺の背中を見てくれ。」

俺は彼女に背を向けそうだった。

「……なに、これ。」

当然の反応だろう。なんせ俺の背中には黒く小さな羽が生えているのだから。サイズは成人男性の手の平くらいで約20センチメートルだ。自分で言うのもなんだが、なかなかには毛はふさふさしていて気持ちいい。この羽は大きさを変えることが出来、普段はこのサイズにしているが、最大で3メートルほどになる。ちなみに何故落ちたときの羽で飛ばなかったのかと聞かれたら、それは樹が邪魔で飛べなかったからだ。

ということでもちよっとした悪戯心も手伝って、羽を最大まで広げてみた。

「ひゃあっ！？えっ、大きくなった！？」

こっちから仕掛けていてなんだが思った以上に可愛い声で驚いたので、俺はシリアスな話しをしているはずなのに可笑しくなってクスクスと笑ってしまった。

「なに？なんで笑ってるの？」

よくわかってない彼女は不思議そうにこちらを見てくる。

「いや、思ったよりも可愛い声だったからちょっと可笑しくって。」

すると彼女は顔を真っ赤にして怒りの形相で睨みつけてきた。

「それって私に可愛くないって言うてるの？」

「そんなことは言っていない。アンタって美人で大人っぽいし、ちょっと意外だなんて思って。」

すると今度も顔を真っ赤にしたが、さっきの怒っている表情とは違って照れたような表情を浮かべている。

思わず抱きしめたくなる衝動を理性を総動員して抑える。

「それと、ほら。」

俺は自分の爪を伸ばして彼女に見せる。

「……これって爪？触ってもいい？」

「そりゃ構わないけど。」

俺が言い終える前に彼女は恐る恐る俺の爪に触れてきた。

「黒くて長くて、…硬いのね。……ねえ、羽にも触っていい？」

「筆ったりしないならどうぞ。」

すると彼女は心外だと言わんばかりに顔をしかめた。

「失礼ね、そんなことしないわよ。」

「……………」

彼女は黙ったままにも言わない。その心中は定かではないが、表情は少し曇っている。

「これが俺の正体だ。」

俺の正体（後書き）

次は彼女の正体が明らかに！とかになると思います。

彼女の正体 其の一（前書き）

思っていますけど他の作家さんはよくあんなに長い文章が書けますよね。慣れでしょうか、それとも根気の差でしょうか。

彼女の正体 其の一

「……………」

「……………」

二人の間には重たい空気が漂っている。彼女は俺が話したきり黙ったままだ。二人の間に会話がなせいで鳥の囀りがやけにはっきり聞こえる。

これと言ったのは失敗だったかと思いはじめて何とか場を和ませようと言葉を紡ごうとしたとき、

「……………わかった。私はあなたを、ヴォイド・クルータスを信じる。」

彼女は微笑みながら応えてくれた。

「ありがとう！ー！ー！」

何とか信用してもらえたようだ。俺はホッと胸を撫で下ろす。

「それで早速で悪いんだが水場かどこかに案内してもらえないか？
体が血生臭くつてな。その泉は駄目なんだろう？」

「ええ、そうね。此処は一応神聖な泉だから。水場はこっち。ついて来て。」

彼女は身を翻しついて来るように言い、そのままどんどん進んでいく。俺は彼女の背中を追って、片手で熊を引きずりながらついていく。

ちなみに彼女の着ている服は柔らかそうな糸で織られたシンプルなワンピースだ。色は少し薄めの黄色で暖かさを感じさせるものだ。そのワンピースと髪の間から時折ちらつく白い肌が妙な色気を持っていて危ない気分になってしまいそうだ。

……駄目だ、なにか会話でもしなければ！

「なあ、そついやまだあなたのことを聞いてなかったんだが。よければ教えてもらえるか？」

「そついえばそうだった、わね。私の名前はセイリア、セイリアって呼んで。」

「わかった、セイリア。それでセイリアは人間なのか？こんな森の

奥に女の子一人で住んでいるから違つと勝手に思っているんだが。もし人間なら謝る。」

セイリアは目を見開いてこっちを凝視してくる。

「……………それがわかってて怖くないの？」

恐る恐るといった感じでこちらを窺ってくる。意味がわからない。なにをそんなに怯えているんだろう。

「怖いわけないだろう。自分自身が化け物みたいなものなのに。それに俺は初めてセイリアを見たときは天使かと思つたし、今でもそうじゃないかと思つてる。…だから、そんなに怯えた顔をしないでくれ。なんだか悪いことしている気分になる。」

俺は自分の思っていることをそのまま言つてやった。すると彼女の顔は暗くなつて、と思えば朱くなつて最終的には俯いた。

…なにかマズイことでも言つただらうか？

「お、おい、大丈夫か？…なにか気に障るようなことでも言つたか？」

俺の言葉を聞いた彼女は首を強く横に振った。

「違うのっ！！嬉しかったの！！馬鹿っ！！………ア
リガト。」

見るとセイリアはライトグリーンの綺麗な目を潤ませ、雫を数滴流
していた。

彼女の言葉を聞き、その姿を見て少なからず驚いたが、彼女の涙を
指で拭ってやり彼女の目を見て、優しく頭を撫でた。
絹のように細くサラサラとしている。

「なにがあつたかは知らないが俺でよければ話しを聞く。俺の秘密
も明かしたことだし。こんな所で会ったのもなにかの縁だ。腹を割
つてお互いのことを話そうぜ。」

「……うん、わかった。」

ようやくセイリアは笑ってくれた。花が咲いたような明るく綺麗な
笑顔だ。

「でもそのまえに、私は天使じゃなくて妖精だから。覚えておいてね。」

彼女の正体 其の一（後書き）

はい、すみません、其の二に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1649z/>

白黒逃避行

2011年12月9日01時12分発行